

当春二月廿日三月六日

同十八日度々之御状追々相達
令拝見候、弥御無事御暮
珍重存候、此元相替義も
無之候、貴殿^ニも去秋より
久々御不快之由旅宿之儀
御難義と存候、併次第被致
順快之旨珍重存候、去年
三月以来此方よりも度々
以書中申入候之處、御報も無之
致不審候、依之米子藤兵衛
方江様子相尋申事候

一 牧野越中守様^江被指上候

内存之趣、御老中様方へも
上り申由、重キ公迈向首尾
好相聞へ御手柄成事候

一 二月十一日越中守様より以

御指紙十二日四時出仕之旨
被仰付、其節御役人中より
被申候ハ、本書^ニ指添書出
候之通、長崎貢物連中之義
并御廻米舟借り之連中

指加被為下置候儀、二品共^ニ
御勘定御奉行所之御作廻故
於御城從越中守様御

勘定方へ御対談相済候由

一 願書并添書由緒書一冊

外^ニ先年御老中様方より

貴殿方へ被遣候御書并

朝鮮國より竹嶋船流寄候

節、水主船頭へ被下物目録二通

貴殿方

御城へ被召出候節独札之書付

都合拾一通、是又十一日

御老中様方^ニも度々御披見

被成候由、段々首尾好一段之事ニ候

一 此方御屋敷御留守居中ニも
何角被致出情之由令承知候
文通之節一礼可申遣候

一 右願之筋事成就もいたし

候得者、諸々御礼ニ余程物入由
嘸左様と被存候、依之先年
被置候金子、此度返済之儀

具ニ被申越令承知候、則

其元より被指越候紙面を以

米子与一右衛門方へ内談ニ遣シ

申候、只今市兵衛事も御役儀

被仰付同役之義殊更古来より
村川大谷両家無他事間柄

之事ニ候得者、表立候而拙者

共より金子之義彼是申遣候而ハ

結句如何ニ存候、内談ニ而之義ハ

随分可申遣候

一位様御認被遊願之筋茂

相廻申由、定而追々入割も

相聞ヘ可申候

一 去年七月九日上野宮様より

以御使者御寺社所江(■) 賴被遣出損

候旨、冥加ニ叶被申義可被
難有存候

一 米子藤兵衛方江之書状、早々
遣し可申候

一 御上江之年始御祝義書中
之趣令承知候、并拙者共方へ之

御狀入御念義存候

一 京都徳田氏江も度々文通

いたし候之処、去春已來貴殿より
すきと書中も遣シ不被申候由

元来京都上々様方より

江戸表へ御頼被遣義候へハ

其元之首尾具ニ被申上

厚々御礼も被申義と存候

重キ願被致義候へハ、所々

詰披御油断有間敷候、前々より

御心安キ貴殿事故御心得ニも

成可申と申入候、此元へ用事

有之候ハヽ、周防様御内小川

助右衛門藪田権平両所之内江

書状御頼可有之候、早々参

事候、具ニ申入度候へ共、書状

重高ニ成候付早々申留候

猶期後音候、恐々謹言

牛尾金右衛門（花押）

四月十二日

大谷九右衛門殿

久良源次兵衛（花押）